

# 足利清風高等学校校内研修の感想

宇都宮大学教育学部 皆川純男

先生方、先日はお疲れ様でした。特に公開授業をしてくださった小池先生、船田先生、森先生、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。「ホーソン効果」を感じていただけたでしょうか？

私は、昨年から東京などで開催されるアクティブ・ラーニング（以下AL）の研究会や公開授業、ALの授業体験などにたびたび出席してきました。どの会も盛況で、全国各地から数多くの先生方が参加しています。こうした会に出席して感じたのは、ALを推進していく上での課題は、「二極化」ではないかということです。これには、ALを積極的に推進していく学校とそうでない学校という二極化と、校内でALに熱心に取り組もうとする先生とそうでない先生という二極化があります。「学校間格差」「教師間格差」が広がっているのではないのでしょうか。

これまでいくつかの学校で校内研修の講師をしましたが、清風高校の先生方の「聞く態度」は実にきちんとしていました。清風高校はALを積極的に推進していこうとしている学校であり、すべての先生方がALに熱心に取り組もうとしている姿勢を感じました。

清風高校の3クラスを参観しましたが、生徒が先生の話に耳を傾け、一人で、あるいはグループで考えたり話し合ったりしていて、居眠りをしたり、ボーッとしている生徒は一人もいませんでした。このこと自体が素晴らしいことで、AL型授業の成果ではないのでしょうか。また、授業の基盤となる、生徒と先生との人間関係、信頼関係がきちんとできていて、日頃からの先生方の指導の賜であると感じました。

ALは、一つの教育方法であり、そのやり方に決まったものではありません。学年やクラスの実態、教科・科目や単元の内容等に応じて、様々なALの手法に挑戦していただきたいと思います。私は「ALはベテラン教師ほどうまくできる」という話をしました。ベテラン教師は教科・科目の内容に精通しており、生徒への説明や発問、指示の仕方がうまくできるからです。これまでの経験を生かし、ぜひAL型授業の推進役になって、「ベテラン教師の逆襲」を若い先生方に見せてほしいと思います。

「ALがなぜ求められるのか」、それは生徒の主体的・対話的な深い学びを促すためです。文科省や校長・教頭が言うからやるものではありません。小学校や中学校では、「言語活動の充実」という形で、また、全国学力テストの実施により、授業がずいぶん変わってきました。しかし、これまで高校では授業改革がなかなか進みませんでした。私は、この機会を逃すと、高校の授業改革は頓挫してしまい、ALが一時のブームに終わってしまうことを懸念しています。全国的に見ると、AL実践の波が急速に広がっています。栃木県内の状況はまだまだのようで、清風高校は県内の推進校になれるのではないのでしょうか。AL型授業は、「フルタイム」「フルアクティブ」でなくともよいとお話ししましたが、「AL指数」を少しずつ高めて、より「深い学び」となるよう授業改善に努めていただきたいと思います。

最後に、校内研修の時には時間がなくて、話せなかった、「数値目標が学校（先生、生徒）を変える」ことについてお伝えしたいと思います。企業では、生産量や売り上げをどれくらいにするか、生産性をどう上げるかは当たり前のことですが、これまで学校社会ではこうした数値目標がありませんでした。

私が校長の時、①国公立大学の合格者数100人以上、②全国模試の各教科・科目の平均点偏差値56以上、という二つの数値目標を出しました。この①②の数値目標は、教頭や教務主任、進路指導部長、学習指導部長と相談の上、達成可能なものであ

り、校長の判断で決めたこと、また、あくまでも目標であってノルマではないことを先生方に説明しました。この数値目標を達成するために、進路指導、学習指導、各学年、各教科、各先生方が具体的にどう取り組むかを、教員評価の行動規準表に記載してもらいました。当時の先生方はかなり驚いた様子でしたが、私が転勤した翌年度に①を達成するとともに、②も複数の教科・科目で達成しました。

清風高校では普通科・商業科・情報処理科について、学年ごとに「目標とする資格取得の一覧表」及び資格取得推進のための行動計画を作成したとのこと。私は、これはすばらしいことだと思います。学校・教師の役割・使命は、生徒の能力を最大限に引き出し伸ばして、生徒が立派な社会人となる基盤をつくることです。目標とする資格取得を達成できるよう、クラスで、授業で生徒を励ましてください。

取り急ぎ、感想を述べましたが、清風高校の先生方がAL型授業をより一層推進し、「〇〇先生の授業を受けて、勉強ができるようになった」「□□先生の授業は楽しい、わかる」そういう生徒をたくさん育ててください。また、資格取得をとおして、自分に自信と誇りをもって生きていける人材をたくさん育成してください。こうした取組が大きな成果をもたらすことを心から期待しています。

平成 28 年 11 月 16 日